

『吉兵衛瓦（かわら）』

家々に、黒く光る屋根瓦があります。今、私たちは、この瓦（かわら）によって、風雨や寒さ、暑さを防いで、快適に生活ができます。

昔、家の屋根は、草や板でできていたので、風や雪に壊れやすく、また火事にもなりやすかった。人々は、たいへん苦勞して、家を守ってきました。



国分村の地主百姓の「吉兵衛」は、屋根瓦をつくろうと思い立ちました。「吉兵衛」は、国分村からとなりの池崎村まで続く、山林を所有しておりました。そして、その山には、瓦づくりに適した、たいへん良質の原料となる粘土がありました。

「吉兵衛」は、池崎村の肝煎（きもいり）「代兵衛」と相談して、越前の国（福井県）から、「七蔵」という、細工職人を招きました。そして、堅田というところに、窯を築き、瓦づくりを始めました。こうして出来上がった瓦は、丈夫で形もよく、『吉兵衛瓦』といわれて、広く知れ渡りました。そのとき作られた細工瓦（鬼瓦）には、越前七蔵の名を彫り、軒瓦には、「吉」の字の印を彫り込みました。それらの瓦は、国分村の薬師堂や八幡村の正八幡宮の屋根に使われました。その後、この瓦づくりの技は、国分や細口をはじめ、近隣の村々にも伝わり、多くの場所で、瓦が作られるようになりました。

また、ある一時期には、当時の加賀藩の重要生産物である「塩づくり」の燃料が、不足するという理由で、「瓦づくり」が差し止められたことがありました。しかし、「吉兵衛」たちの陳情によって、「瓦づくり」が許され、再び「瓦づくり」が続けられました。そんな中から、越前の細工師七蔵から、直伝を受けた中川原村の久三郎は、更に、改良を加えました。そして、国分村の鯨山神明神社、大野木村の秋葉神社、万行村の清水観音などに、その優れた作品を残し、今に伝えています。

現代の『能登瓦』も、雪や霜に強く、北国の気候によく合うので、たいへん重宝されています。じつは、『吉兵衛瓦』が、その元祖なのです。

（山下 郁雄）